

山日記 その一

堀辰雄

青空文庫

九月三日

ゆうべ二時頃、杉皮ばかりの天井裏で、何かごそごそと物音がするので、思はず目を覺ました。ちやうど僕の頭の眞上のへん。鼠だらう位に思つて、やがてもう音がしなくなつたので、又すぐ寢てしまつた。

朝、起きぬけにけふこそ一つ仕事をしてやらうと思つて、霧の中をすこし散歩をして歸つてくると、僕を迎へる女房たちの様子がちよつとばかり變なもので、どうかしたのかと訊いてもなかなか白状しない。何か僕のいやがる事があつたらしい。

が、とうとう白状した——けさ、僕が散歩に出た後で僕の部屋の雨戸をあけて見ると、庇から變な白いものがぶらさがつてゐる。よく見ると、二尺ばかりの蛇の抜け殻。——どうしてこんなものがこんなところにあるのだらうと不審なまま、僕が蛇の大嫌ひなのはみんな知つてゐるので、留守の間に片づけて置いて、僕には黙つてゐようと申し合つたのださうだ。

僕はそれを訊いた途端に、もうすっかり忘れてゐた、ゆうべ天井裏でごそごそやつてゐた物音を思ひ出した。どうも鼠にしてはすこし大人しすぎると思つたが、ことによるとそ

の蛇の奴がそのとき丁度僕の頭上で脱皮したのかも知れない。

僕達のコツテエヂのまはりは、何しろ谷の上だから、少しは蛇も出るだらうと覺悟はしてゐたが、夏ぢゆう一ぺんも見かけなかつたので好い工合だと思つてゐたら、夜なかに屋根裏へ這ひ込んでゐようとは本當に知らぬが佛。……

もうその蛇はとづくに出ていつたらうが、その窓枠に手をついて背伸びをして見ると、まだ庇の穴から氣味の悪い抜け殻の切れつばしがひらひらとしてゐる。さつきいそいで引っ張つたら途中で切れてしまつた——それだけで二尺餘りも。あつたのださうだから、よほど大きな奴だつたのだらう。まだ残つてゐるのは首の方の由。——

蛇の抜け殻を見るのは縁起が好いのださうだが、どうもそいつがぶらぶら下がつてゐる窓の下で、勉強をするのは閉口だから、勉強にいるやうなものはみんな廣間に移して、しばらくその一隅を假りの書齋にしつらへた。そんな事でうかうかしてゐるうちに、午前中、せつかく仕事をやらうと思つてゐた氣分がめちやくちやになつてしまつた。

午後、阿比留信君來訪。霧のなかを歩いて來たので、だいぶ上衣がしとつてゐるやうだし、家の中もけさから何んとなく濕つぽいので、煖爐に火を焚いた。早速阿比留君をつかまへて、けさの出來事を話して聞かせる。が、君はさう驚いたやうな顔をして聞いてゐる

ない。こんな山住ひではごく有りきたりの出来事のやうにして静かな様子で聞いてゐる。

それから阿比留君が話を引きとつたが、なんでも君達が數年前借りてゐたコッテエヂには、屋根裏に小さな蝙蝠が棲まつてゐたこともあつたさうだ。夕方、君の妹が鏡に向つて髪をいぢつてゐたら、なんだかその鏡のなかを黒い影がすうすうと横切るので、ふり向いて見たら、それがその蝙蝠だつたと云ふ……

「それにしても、あの蛇はまだ天井裏にゐるのだらうかね？」

「いや、脱皮してしまつたんだから、そりあ出ていつてしまつてゐるよ」

「さうだらうなあ」

煖爐では、もう火がぼうぼう音を立てて燃え出してゐた。出来るだけ威勢よく燃えて、おれの裡の、蛇なんぞをびくびくするやうな、けちな根性を燃やしてしまつてくれるとい

い。
しばらくそれから二人とも黙つて火を見まもつてゐたが、やがて私の脛を衝いて、

……………Wie vor sich selbst

erschreckt, durchzuckt die Luft, wie wenn ein Sprung

durch eine Tasse geht. So reißt die Spur

der Fledermaus durchs Porzellan des Abends

(蝙蝠は自分自身を怖れるかのやうに、空中にはためき出る。

さうして茶碗に罅^{ひび}が入るやうな工合に、蝙蝠は掠め過ぎる、

磁器に似た夕闇を横切つて……)

といふ詩句がひとりでに浮んできた。こなひだちよつと讀んだリルケの「ドゥイノ悲歌」中の一句だが、——さういへば先日芳賀檀君が來られての話に、目下そのリルケの「悲歌」の全譯に着手せられ出してゐるとの事、——かういふいまの生きることの難しいやうな秋に、あの生への悲痛なる讃歌ともいふべき「悲歌」を、私達のために紹介してくれることほど有意義な仕事はあるまいと、思へる。その大いなる仕事をはじめられようとしてゐる芳賀君は、甚だ元氣だつた。僕は君を大いに羨んだ。……

夕方、阿比留君が歸つてから、僕は霧のために早目に薄ぐらくなり出した小屋の中に、

いつまでも燃え残りの火を守りながら、ぼんやりとしてゐた。

どうもけさ片づけてしまはうと思つてゐた小さな仕事を、これからすぐにでも取りかからなければならぬのだが、それが急に厭になつた。ろくな仕事をこつこつやるより、かうやつてぼんやりしながら「悲歌」のことだの、僕が近いうちに身を打ち込んでやりたいと思つてゐる仕事のことだのを考へてゐる方が、まあどんなに好い事だらう。……

いつもの事ながら、さういふ自分が本氣でぶつからうとする仕事の日々が近づいてくれば近づいてくるほど、僕はいよいよ怠惰になつて、自分でもどうしやうもない位、無爲をきはめる。さうしてもう完全に怠惰に、無爲になり切つたとき、やつと仕事に手がかりができる。それまでさうやつて何もせずにはどうしやうもないのが、さすがの自分にも、いかにも苦しい。しかし、いまの自分には他にはどうしやうもないのだ。

阿比留君の話では、蛇は脱皮する前に、かならず半睡状態に陥つてあらゆる動作がきはめて鈍くなるのださうだ。僕なんぞのも、ひよつとしたらその類ひかも知れない。

あんなに蛇をこはがつてばかりゐた僕の、丁度寝てゐる眞上でもつて、その蛇が夜なかに脱皮をしてゐる物音を聞きとがめながら、それとは知らずに平氣で寝てゐたなんて、どうも知らぬが佛とはいへ、僕にとつて何かの瑞兆であればよい。

青空文庫情報

底本：「堀辰雄作品集第四卷」筑摩書房

1982（昭和57）年8月30日初版第1刷発行

初出：「文學界 第五卷第十号」文藝春秋社

1938（昭和13）年10月号

※初出時の表題は「山日記」です。

※表題は底本では、「山日記」
「#1段階小さな文字」その一「#小さな文字終わり」
となっています。

入力：tatsuki

校正：染川隆俊

2013年8月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山日記 その一

堀辰雄

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>